

22 小石川 適性 I

適性検査 I

注 意

- 1 問題は **1** だけで、**4** ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は **45** 分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出**しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

1

次の二つの文章を読み、あとの問題に答えなさい。
（*印の付いている言葉には、本文のあとに「言葉の説明」があります。）

文章 1

きみが自分で選びとったわけでもないのに、つらくて悲しいことにも出会わなければならぬ日が、この先にはあるかもしれません。そんなときには、いつものきみのように、前向きにものごとを考えたり、かっこよく過ごしたりなんて、とてもできなくなりますね。悲しいときの自分なんて消してしまいたいと思うことさえあるかもしれません。

でも、そんなときにも、わす忘れないでいてほしいことがあります。

うれしいときだけがクキミではありませんよ。笑っているときのきみだけがクキミではありませんね。悲しいときのきみも、はずかしくて消えてなくなりたいと思うときのきみもクキミなのです。

だから、つらいときや悲しいときの自分もだいいじにしてあげなければいけません。成功して喜びでいっぱいになっているときのきみも、失敗してなみだを流すきみも、クキミです。どんなときの自分もだいいじにすること、自分のことをいつも大好きだと思っている

こと、これはとても大切なことです。だから、けっして忘れないでいてください。

きみが生まれてきて、いまここに、こうして同じときを生きているということ、とてもうれしいこと、あり、ひとつの*クキミ奇跡のようにすばらしいことなのです。いま、わたしがきみにこうして話しかけることができるのも、きみがいかに、わたしがここにいるからでしょう。それは、ほんとうにすてきなことです。

（日野原重明「十歳のきみへ」による）

○言葉の説明

奇跡クキミ——ふつうでは、とても起こりそうもない

不思議な出来事クキミ。

文章 2

（「ぼく」は、「ミライ」や「アスカ」の父で、子供たちといっしょに池のほとりに出かけた。「たーちゃん」とは、「ぼく」の母である。）

日曜日の平和な朝、ストックキングで作った*プランクTONネットを、池で曳いてくる。

ぼくたちはもう水の中のいのちの賑わいをよく知っている。ならば、それをもっと深めてやろう。賑わいは目に見えないところから始まって、無限に広がっているのだから。

家に戻ると、*昨晚遅くいったん自宅に帰ったたーちゃんがちょうどやってきたところだった。

テーブルの上に、古めかしい直方体の木箱がでんと置いてあった。

「やっぱり、あったわよ。」と誇らしげに言う。

たーちゃんは本当に物持ちがよくて、ぼくが子どもの頃使っていたものはたいていどこかにしまいこんでいる。

木箱は一面がスライドするようになっており、そこを開けるとつんと懐かしい匂いがした。

黒々とした*甲虫を思わせるボディと、まあいい反射鏡。そして、銀色の筒に納められた接眼レンズ。乾燥剤とカビ防止剤をしっかりと入れておいてくれたので、レンズの状態も完璧だ。「顕微鏡ならあんたのを取ってあるから、買わなくてもいいわよ。」と言った彼女はたしかに正しいのだった。

いのちの賑わいをぼくたちが感じるとして、それを底支えするのは、目に見えないけれど、*確固として存在している小さな生き物たちではないか。たとえば森の腐葉土の一掬いの中には何億もの微生物が息づいていて、*森全体の生態系の要となっている。

水の中も同じことだ。肉眼では見えない小さな生き物こそ、豊かな世界の主役なのだ。*実感できれば、ぼくたちはもっと楽しくなれる。そのための技術というのは、つまり、居ながらにして*ミクロの世界を想像できる能力のことであり、ぼく自身、*小学校高学年の頃、理科クラブでさんざんトレーニングを受けた。*昨晚眠る時、その頃の記憶が際限なく湧き上がってきて、ぼくはそういう「*実感」を伝えたくてうずうずしていた。要は、顕微鏡を使って、この世には目に見えない世界があることを知ることだ。*頭で理解するのではなく、*現実として確認すること。*いったんそれをしてしまえば、ぼくたちは目に見えない世界を常に感じていられるようになるんじゃないか。

低倍率にセットして、植物プランクトンを見る。さっそく*ミカヅキモを大量に発見。こいつは形も特徴的だし、すごくわかりやすい。ミライも「ほんとにミカヅキだあ。」と喜ぶ。ミライは接眼レンズを覗くのははじめた。

倍率を上げていくと、名前も知らない 藍藻類*やら、
勲章*のような 幾何学模様*の 緑藻類*やらが次々と発見できた。

「な、水の中にも見えない草がいっぱいあるって言っただろ。」

一方、アスカは、「どれ？ どれ？」と言いながら、なかなか理解できないらしい。変な模様、くらいにしか思わないのだろう。そもそも、レンズで拡大*して見ているのだということも理解していないのかもしれない。

「すごいぞお。ちいさいけど、いきてるのか、うおっ、こいつうごいてるしっ。」ミライが興奮*して言った。

ぼくも接眼レンズを覗き込んだら、鞭毛*を振って泳ぐ*ミドリムシが、視野*の中央を横切るところだった。

「すごいのは見つけたな。こいつは動物なのか植物なのかわかんないんだ。つまり、動物と草とか木の間みたいなのやつ。」

ミクロの世界では、物事の分類もなんとなくおおざっぱで、いろんなものの「中間」がある。ぼくはそんなふうに感じている。

ミライが動くものを探し始めて、*ゾウリムシを見つけたあたりで、ぼくは探索対象を動物プランクトンに切り替えることにした。池の水が入ったペットボトルを透かすと、小さいやつらが動いているのが見えるから、それらをピペットで吸い込んでスライドグラスに置いてやる。

「うおー、かっこいいぞお。」とミライが言うのももっともだ。ミジンコの*ノープリウス幼生*はどこかのSFで見た宇宙船*にそっくりなのだ。風船のようなワムシ*の仲間もかなりいて、透き通った体の中で臓器*を蠢かせている。

ぼくたちと同じ世界を共有しながら、ここは別世界だ。ぼくたちが直接知覚する以上のものが、この世界に確固として存在している。

(川端裕人「てのひらの中の宇宙」による)

○ 言葉の説明

プランクトンネット——プランクトンを捕らえる

目の細かい網。

甲虫——かぶと虫のように外側の羽が固い

こん虫の仲間。

生態系——ある地域の生物の集まりとそれをとりまく環境をひとまとめにしてとらえたもの。

ミクロ——きわめて小さいもの。

ミカヅキモ

藍藻類

緑藻類

ミドリムシ

ゾウリムシ

ワムシ

幾何学模様

ノープリウス幼生

図形を組み合わせた形。

ミジンコをふくむエビ・カニの仲間の子供の状態。

S F——科学的な空想小説。

蠢かせている——全体がわずかに絶えず動くようす。

【問題1】 文章1の「わたし」が言いたいことは何ですか。

また、文章2の「ぼく」が子供たちに大切だと気づかせたいことは何ですか。それぞれ四十字以上、五十文字以内で書きなさい。なお、最初のます目から書き始めなさい。「、」や「。」も字数に数えます。

【問題2】 「問題1」でまとめた二つのことをふまえて、「生きていく」ということについて考えてみましょう。

そして、その考えたことを、あなた自身が見聞きしたことや体験したこと、例を挙げながら書きなさい。なお、内容のまとまりやつながりを書いて段落に分け、四百字以上、四百四十文字以内で書きなさい。また、次の「きまり」に従いなさい。

【きまり】

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 「、」や「。」も字数に数えます。
- 段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。
- 最後の段落の残りのます目は、字数として数えませんが、

メモ用紙として使ってもかまいません。

